

國學院大學學術情報リポジトリ

発題4体育学・スポーツ文化論の視点から
(平成二十一年度國學院大學人間開発学会第一回大会
國學院大學人間開発学会設立記念公開講演会・シン
ポジウム
人間開発学研究の胎動--大学の行方を見据えて) --
(公開シンポジウム人間開発学の樹立に向けて--展望
と課題)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 一, 正孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001174

《発題④》「体育学・スポーツ文化論の視点から」

一 正孝

人間開発学会発足にあたり、体育・スポーツ学的視点で取り組むべき課題について基本的なことを発表したい。

人間開発学そのものは、学際的（○○○的協力）、いくつかの異なる学問分野がかかわること、性格を持っている。「学際」というのは本来、各専門が確立して始めて意味をなすものである。この専門的な「知」の根拠になっていっているものを疑ってかかることを共通理解にしている面がある。ある意味「雑種性」と見た方がいいのかもしれない。

従来、日本学術会議では体育・スポーツ学に関して、複合領域として位置づけていたが、最近では分科「体育学」から「総合領域分野」になり、分科「身体教育学」、「スポーツ科学」、「応用健康学」の三つの細目が新設されている。

人間開発学が新しい学問的視点を持つ条件としては、①長期的視点に立って、萌芽的な学術を発掘すること。②時代のニーズにあった新しい学術体系を提唱すること。③学術に関わる緊急課題に迅速に対応すること。④俯瞰的視点に立って、新たな取り組みが必要とされる総合的な学問分野を提唱すること。等の基本的な視点が必要になってくるであろう。それに従来の各自が取り組んできた専門領域を越えた総合的な学術を認識し、その中に自らを位置づけて問題に立ち向かうことが問われてくる。これらのことを実現していくために、研究者、教育者、指導者、学生等に必要になってくることは、①論理的科学的思考能力、②課題解決探求能力、③自己表現力、④知識技能の活用

力である。これらはポスト産業社会における「情報」、「知識」、「対人サービス」というキーワードを考えるときに必要であり、これからの知識基盤社会にも対応するものであろう。

一九二四（大正十三年）年に設立された国立の体育研究所では、哲学、教育、解剖、生理、心理、病理を含んだ総合的な学問として「体育学」は考えられていた。人間開発を考えるときに参考になるものであろう。体育の概念がスポーツをも含んでしまうという曖昧さから、体育学では学校体育における体育の問題を超えて、スポーツが研究の中心になってきている傾向がある。体育だけでなく、健康科学とスポーツ学も含んだ総合的な学問の総称として考える必要がある。今後の基本的な方向性としては、人間の身体運動や行為を理論的・実践的に問題にすることが重要になってくるであろう。

現在の体育学会では、①体育哲学（従来は体育原理）、②体育史、③体育社会学、④体育心理学、⑤運動生理学、⑥バイオメカニクス、⑦体育経営管理、⑧発育発達、⑨測定評価、⑩体育方法、⑪保健、⑫体育科教育学、⑬スポーツ人類学、⑭アダプテッドスポーツ科学となっているが、スポーツ学による分類では、①スポーツ哲学、②スポーツ工学、③スポーツ栄養学、④スポーツ医学、⑤スポーツカウンセリング、⑥スポーツ心理学、⑦スポーツ人類学、⑧スポーツ社会学、⑨スポーツ史学、⑩スポーツ教育学、⑪スポーツ運動学、⑫バイオメカニクス、⑬スポーツ法学、⑭測定評価学、⑮武道論、⑯スポーツ生理学、となつている。人間開発学的視点として必要なものは、それ以外の分野として、①身体教育学、②スポーツ健康学、③身体文化学、④身体倫理学、⑤スポーツ倫理学、⑥スポーツ文化学、

⑦身体運動学、⑧スポーツ経済学、⑨スポーツ経営学などが考えられるであろう。

人間開発学の一つのキーワードとして「身体性」の問題がある。教育学的、体育学的、健康学的、スポーツ学的に「身体」の問題をどのように検討していくかが課題になってくるし、「身体図式」、「身体意識」、「感覚の運動性」、「身体工作」、「身体教育」、「身体表現」などについて取り組むことになるであろう。

次に、スポーツ文化論の視点で考えることにしたい。今日の日本では、文化は自然と対置される人間的活動の所産という記述の意味が中心であり、日本で言う「文化住宅」、「文化包丁」、「文化鍋」といった言葉が「消費の生命過程」にかなり呑み込まれている可能性がある。「消費」に対する「文化」を考えると、①合理的計算によって作られるのではなく、慈しみ気遣い敬いつつ育て上げられていくものであること、②有用性や効用性にとらわれないこと、③現在に目を向けるだけでなく、過去および未来という時間的な広がりを考慮に入れること、④いま、この自分だけでなく、未来の自己にも配慮すること、⑤真善美をめぐって卓越性を競い合う共同体に支えられていること、⑥その共同体にコミットすることによって他者とは異なる自分が現れ、同時にそれぞれ独自で異質な存在としての他者を迎え入れて、互いに慈しみあうこと、などが挙げられよう。

生涯スポーツを目指す場合には、①スポーツの価値に気づき、スポーツに接近していく態度を身につけるように動機づけをし、②スポーツと人間生活のかかわりを理解し、スポーツを楽しむための知識とスポーツを実践できるような技能の習得をはかり、スポーツ能力の開発を進める、③スポーツを実践し、

スポーツの楽しさや喜びを味わいながら、スポーツの価値を実感できるようにする。④スポーツの価値を創造し、スポーツによる仲間との交流を通して、自己開発あるいは自己実現がなされるようにすることなどが大切な要素となってくるであろう。

生涯スポーツ理論は、文化的視点を大切にして取り組み、健康づくりのためには、生物学的視点で取り組み、スポーツ能力開発のためには、運動学的視点で取り組み、スポーツの価値を実感できるようにすることが大切である。そして、スポーツ文化そのものがサブカルチャー（正統的、支配的な「文化」ではなく、その社会で価値基準を異にする一部の集団を担い手とする文化）としてのスポーツからの脱却と展望が問われることになるであろう。

参考文献

雑誌『現代思想』三七巻四号、特集「変わり行く教育」、青土社、二〇〇九年
 仲正昌樹『日本の現代思想』、日本放送出版、二〇〇六年